エターナル∞トレイン

墓民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エターナル∞トレイン

【Ｎコード】
Ｎ２３３３Ｏ

【作者名】
墓民

【あらすじ】
その汽車は走り続ける……。　月明かりに照らされ、終わりのない道を淡々と進んでいく。　夜明け前、ゆらゆらと揺れるそれは静かに闇へと消える。
夢も希望もその汽車の前では全てが呑まれ、無になる。
木々は哀しげにざわめき、人を寄せ付けようとしない空気が漂う中、この日ある少年を受け入れる。
平凡な日々をおくる１７歳の少年「坪内彪我」に突如襲う惨劇。
そして彪我はある奇怪な汽車の一員になることに……。

ミステリーとファンタジーが織り成す世界を描いたファンタジー小説。

序章

月明かりに照らされながらも、彼にとってその影響は皆無に等しいと言えた。
速さ、速度、刹那的要素が何よりも必要になってくる。
機動力――彼は何よりもそれを尊重してきた。
迅速な行動が彼の持ち味。
それ故に、彼のタスクは過酷を極めることは言うまでもなく、NO2という称号は彼に相応しかった。
月は彼等を静かに見守っているだけ。
暗闇の大地は、月明かりによって照らしだされるが、そこに彼は存在しない。
物体という「個」の否定を証明していた。
あるのは仄かに揺らめく禍々しいもう一つの影――朱と黒とが混沌としていた。
絵では到底再現不可能であろう未知なる物体は、稀薄化した「個」とはわけが違う。
それは構造上の問題なのか、それとも、科学的――否、生物学的問題なのか。
残念ながら、そこに真理は無いのである。
双方の「個」という曖昧な存在に、誰が真理を見いだせるというのか……。
広大な荒野は、夜の静けさに反発するが如く、動きを見せる。
いち早く感づいた彼は、彼固有の能力で、それと一体化しつつ体勢を整える。
唐突に襲う砂嵐を弾いて進む。
彼の半径2メートル以内に、砂粒は無くなり、彼の姿が、今、はっきりと捉えることができる。
その影響か、彼の周りだけが別の空間とも思わせる。

砂粒は彼を避ける――否、避けているように見える。
この一連の動作により、信じがたいほど彼と影の間隔は縮まっていた。
地面の中に身を潜めていた影は、この一瞬の隙を見抜く。
この時点で、影は悪魔へと変貌する。
地面は捲り上がり、その悪魔の手が姿を現す。
その手は一直線上に居る標的に向かい、弾丸のように襲いかかる。
が、悪魔の考えは浅薄であった。
彼の空間に入るや否や、悪魔の手は無惨にも、切り刻まれる。
そう、鎌鼬だ。
砂が彼を避けたのではなく、鎌鼬によって、砂粒は近づくことができなかったのである。
「ふ……」
彼は吐息を漏らす。
勝利を確定したからだ。
彼と悪魔の、剣が峰状態は解き放たれる。　悪魔の手を切り刻んだ鎌鼬は、互いの距離を把握するためでもあった。
彼の間合い――攻撃範囲内に入り込んだ者は鎌鼬によって切り刻まれていく。
その範囲は、確実に悪魔を的に得ていた。
鎌鼬は悪魔に追い討ちをかけるように、襲いかかる。
腕を伝って本体を直接切り刻む。
蟻地獄、例えるならそれが一番相応しいだろう。
悪魔は鎌鼬から逃げることも防ぐことも出来ず、ただ死を待つだけだった――
木々はソレを嫌がるようにしなりながら避け、ありもしない通過路を創り上げる。
揺り籠のように左右するソレは、まだ何か物足りない輝きに見守られながら、今にも止まりそうな姿で、妖しげな光に溶け込む森林を進んで行く。

ソレはボウボウと煙を上げ、全てを惹きつけない不気味な妖気を漂わせながら、ありもしない道を悠然と走り抜けていく。
ソレはどこか遠く未来を見つめているようだ。
未来にも過去にもソレに終わりは存在しないのに……。
「今夜は新人が増えそうだな、健太」
レストランの中、窓の外を眺める牛鉄鉄男。
「え、どうしてですか？」
「森が騒いでいるだろ、多くのアークが彷徨っている証だ」
「外は現実世界ってこと……、ですか。まったく、不思議ものですね」
そうだな、と相槌を打つ鉄男。
「まあ、トレイン内の住人しかわからないことだ。　お前のように風のように生きている奴は知らなかっただろう」
風のように……か、たしかにそんな生き方だな。
毎日のように拠点を転々とし、アーク狩りをしている俺にとっては。
「3ヶ月ぶりに戻ってきたと思えば、今度は3日後にはまた出るなんて言い出しやがって」
「……その件についてはほんと牛鉄さんには迷惑をおかけします。どうしても、やらなければいけない事を見つけたんです」
いや、「思い出した」と表現したほうがいいか。
はあ、と溜め息をつく鉄男。
「そう思うなら、そんな大怪我負って帰ってくるな」
包帯でまかれた俺の右肩を横目で見る。
俺は隠すように押さえる。
「これは俺の失態です。　不注意でした」
「全治1ヶ月だそうだな、それを無理して3日で行ってしまうなんて……、お前ほど無茶な弟子は初めてだ」
「行ってからも暫くは安静にしておくつもりです」
「あたりまえだ。しかし、話ってのはそれだけか？」

「いえ……実は、牛鉄さん。あなたにお願いがあります」
「なんだ」
俺はウエストポーチから、あるものを取り出す。
それを見た鉄男は目を見開いた。
「これは……。ということはお前……」
「3つとも手に入れました。一つは既に俺が使いました。二つ目は、牛鉄さん。あなたにお渡しします。自由に使ってください。　そして、もう一つは……」
俺は言いかけてやめる。
……。
……。
沈黙が続く。
鉄男は複雑そうな面持ちで、また窓の外を覗く。
窓の外に広がる世界はすぐ近くにあるようで果てしなく遠い。
それはあの月よりも遥か遠く。
5年前は俺もあの世界に居たのにな。
「俺には、会って謝らなければならない奴がいるんです」
小さく呟く。
心の奥底に眠っていた人物。
途端にその記憶が一気に溢れ出す。
涙と一緒に……
――あの頃は本当に幸せだった。
アイツと一緒に過ごす日々はかけがえのない思い出であり、一つの生きがいでもあった。
アイツといると、心が安らぎ、楽しいことばかりだった。
俺の所為でアイツを失うまでは――

第一章　二つの風

もう慣れた。
何も感じやしない。
頭は赤一色。
痛みに慣れるまで寸刻程しかかからなかった。
体中が痺れているようだ。
喉は疾うに潰されている。
これ以上する必要はないのにも拘わらず金属バットはおれをめがけ、容赦なく振り下ろされる。
目が虚ろになりながらも、おれの視線は彼らの方向を維持する。
どうせならもう死んだ方がましだ……。
彼らはおれをゴミのように見る。
嫌だ、すぐに逃げ出したい、でも足は思い通りに動かない。
恐い、次は何をされるんだ。
恐怖が痛みに変わる。
誰か助けて――
助けて……
たすけて……
心身の疲弊感は既に限界を達している。　金属バットはおれに渾身の一撃を放つ。
ぐしゃっという内臓が潰れたかのような音が体中に響く。
ここでおれの限界が来たのであろう。
……おれの脳神経は、通常に作動しなくなった。
この時点で何も感じないおれは、完全に五感を失ったと言える。
地球が衝撃で反転してしまったかのように世界がガラッと変わる。
目の前の地獄のような真赤な世界は消え、まるで闇のような黒の世界が広がる。
不気味だがおれはこの世界が一番落ち着く。

誰にも邪魔されず、おれの生き方を理解してくれるたった一つの静寂した空間。
ここはいつも居心地が良い。
なのに何故か寂しい……
おれはここに居ちゃいけない。
抜け出す方法はないのか？
……ある、絶対に。
健太、おれは諦めないぞ。

――　５年前、当時俺は１６歳。
名前は米倉健太（ヨネクラ ケンタ）。
ごく普通の高校生で、父、母、妹の４人で、此処、南原市に住んでいた。
この地域では凶悪且つ奇怪な事件が多発している。
最近は、特にその事件が目立ってきている。
それは、１０代の学生の殺人、行方不明事件である。
ただの事件ではない、この事件はどれも未だに解決していない。
それも殺人事件に関しては、その誰もが獣に喰われたような抉られた跡があり、惨たらしい状態になっている。
どの事件も山や森の中で起きていて、それを見た人は居るはずもなく、発見者の証言によると、人間では出入り不可能なような険しい森の奥で、殺伐とした中、辺り一面血で染まっていたそうだ。
非道い時には１０歳くらいの幼い人骨も発見されたそうで、これらを結びつけると、犯行はある一定の人物か集団、そして学生に何か恨みがある者、となる。
しかし、犯行に使った凶器は全く検討がつかないので、もしかすると本当に獣に襲われたのかもしれないという異論もあがっている。
行方不明事件の件は全く謎につつまれていて、殺人事件がかなり頻繁に起きているから、それと何か共通するものがあるのではないかというのが警察の考えだ。

無論、未だに解決していない。
殺人事件に対してこの事件はかなり稀に起きている。
今年は一人行方不明になっている。
行方不明事件では、だいたい二十歳前後の男性が犠牲になっており、これも謎を深める要因としかなり得ない事実である。
解明しようとすればするほど謎が深まるこの事件に、警察は悩まされているのが今の現状だ。
そのおかげで、手の付け所のないものとなっている。
そしてこの話題は、俺が思っていたよりも早く市内の学校に知れ渡っていった……。
「健太ー。今朝のニュース見たかよ、これで今年入って8人目だぜ」
朝から物騒な話題をふっかけてくるのは沖田迅蔵（オキタ ジンゾウ）。
こいつは俺の親友であり、同じクラスメイトでもある。
あだ名は名前からとって「迅」
肌が黒く、背が低く、小柄な体格から、「黒豆」とも言われている。
特技は将棋で、今年は全国で4位という実績を残している。
迅は、中学、高校と野球部に入部し、並外れた才能で一年生にしてレギュラー、五番サードがセットポジションである。
迅は幼少の頃、チームでリトルリーグに出場し数多くの成績を残している。
中でも迅は特にその実力を発揮した。
持ち味である彼のスイングにはキレがあり、並外れたバッティングセンスで球場を沸かせていた。
その魅力に蠱惑される者は多く、今や校内ではカリスマ的な存在となっている。
しかし、最近は部活を休みがちになり、存在は薄れつつある。
「ああ、それなら見たよ。昨夜鴎外で中学生の女子が遺体で発見されたってやつだろ？　誰の仕業かしらねぇが非道いもんだな」

「鴎外は特に狙われてるよな、今月二人も死んでるし」
付け加えるように言う。
迅はうんうんと、頷く。
「学生ばかり狙うなんて、最悪な奴らだぜ。健太もこんなこと許せねぇよな」
「まあ許せるも何も、俺たちがどうこう出来ることじゃねぇしなぁ」
この事件が報道され始めてからは、迅は苛々する日々が続いていた。
迅は人一倍正義感が強い。
誰かの為に自分を犠牲にできるタイプの人間だ。
「健太、おれは決めたぜ。おれが今週末その鴎外に行って犯人の正体暴いてやる。おれは獣の仕業なんかじゃないとみてるからな。」
「一応俺は獣説に賛成なんだけどな。人間の所業じゃないぜ。」
「それを確認する為に行くんだよ」
「その正義心はいいが、お前絶対早死にするタイプだな」
「おれはこういう、残虐な犯罪が許せねぇだけだよ」
こいつには恐怖というものがないのか。
「わかった、わかった。だけどもう少し落ち着いて考えろって」
「落ち着いてなんかいられねぇよ」
ん？て、まてよ……そういえば今週……。
「話変わるけど、……迅って今週末何かなかったっけ」
「ギクッ」
「お前、アニメとかではよく聞くが、リアルでその擬音を口に出す奴は初めて見たぞ」
ははは、と元気のない声を漏らす。
「う、し……」
「牛？」
「ちげーよ。　つか、試合なんかどーでもいいんだよッ」
「……あ」
「試合ねぇ」

「……ミスった」
「最近部活出てないことぐらい知ってるよ。　なんで出ないんだ？」
「ただ出たくないんだ」
「だからなんで出たくないんだよ」
もう一度問い直してみたが、迅は視線を逸らしたままだ。
明らかに動揺している。
「今回の試合だって、絶対活躍してやるって張り切ってたじゃないか」
迅はニ週間前から様子が変わり、部活に出ないようになった。
野球部一丸となって夏季県大会に向けて切り替わっていた矢先、チーム一の期待のルーキーが練習に出なくなったということで、チームの志気は下がっていった。
今最も期待されていただけに、チームを裏切る形となってしまった。
そして今週末はその高校野球夏季県大会である。県立南原第一高校は、野球部で毎年県上位の成績を残し、過去十回甲子園に出場したことのある有名校で、伝統ある高校である。
俺は家庭が忙しいので、部活に参加しない替わりに野球部（迅）の試合を応援しに行ったりしている。
まあ、スポーツが苦手というのもあるが。　それは俺にとって一つの楽しみでもあった。
身近な友達が活躍することは自分も誇らしいし、嬉しかった。
「何があったか俺にくらい教えてくれよ」
「……何でもないんだ。本当に、何でもないんだ　」
「何でもないことないだろ！……て、おいっ」
「ほうっておいてくれ」
迅は俺を押しよけて教室から出ていった。
キーン　コーン　カーン　コーン……。
予鈴が鳴る。
その音はせつなく、体中に染み込むように響いていく。

他の生徒は移動教室により、もう誰もいなかった。
太陽はまだ沈みそうにないが、どうしてか心の灯火は消えて暗く感じる。
太陽が雲に隠れる。
「友達」とは何なのか。
生きていく上で、支え合っていく仲間であり、一番の理解者だ。
人生は孤立ほど寂しいことは無い。
人間は、友達（仲間）と協力することで、生きていくことができる。
俺は友達をつくりたいし、悔いの残らない高校生活を送りたいと願っていた。
「……俺は迅の何なんだ」
時計を見る。
あと、1分か。
今日最後の授業を受けに教室を後にする。
最近の迅はいつもあんな感じだ。
部活の話題は必ず避ける。
というより、俺自身と若干距離を置いている感じがする。
気のせいなのかもしれないが。
迅の身に何かが起こっているのは間違いない。
……野球部の知り合いに聞いてみるか。
野球部の練習は4時からだからそれまでに聞かなきゃな。
俺は隣の教室に入る。
この学校は全校生徒720人で一学年6クラスある。
野球部は一番人気で一学年約20人が入部しており、全員で64人もの部員がいる。
「樫宮君。ちょっといい？」
友達と一緒に教室から出ようとした野球部の樫宮刃（カシミヤ ヤイバ）に声をかけた。
樫宮は迅と中学から一緒で、樫宮もまた、スポーツ推薦でこの学校に来ている。

運動神経は迅ほどではないが、レギュラーのスタメンに入っているだけあって一年生にして相当の才能の持ち主なのだと思う。
体格も恵まれていて、身長は１８０センチ以上で、体格も良い。
樫宮は投手でクローザー。
彼は南原野球部一のフォークが投げれる投手で、それは並大抵の努力じゃ身につけることのできないキレのあるフォークである。
手元でグイっと落ち、打者にとってこれほどまでに打ちにくいラインを攻める球は完膚なきまでに磨き抜かれている。
そんな樫宮は今や南原野球部の主力メンバーの一人である。
「何だ健太か、どうしたんだ？」
クラスの違う俺が久しぶりに話しかけるので少し驚いているようだ。
「いや、迅のことなんだけど、最近野球部の練習に出てないって聞いて、どうしてか樫宮君なら知ってると思って……」
「……」
樫宮は険しい顔つきをして、途端に黙り込む。
「迅蔵は今俺にとって邪魔な存在だ。一年にレギュラーは一人でいい。よって、俺には関係ない」
「そんな言い方、あるかよ……」
否定はできなかった。
この時期にはもうどの学年も部活のレギュラー争いが激しさを増す。
ライバルは一人でも少ない方がいい。
だが、あの表情には何か裏がありそうな気がする。
「樫宮君、本当に何も知らないのか？」
「……それは」
何か言おうとして一呼吸おく。
「それはお前が一番きづいてやらないといけないんじゃないのか？とにかく俺には今どうにも出来ない。今は今週末の試合に集中するだけだ」

言い返す言葉が見つからなかった。
「言いたいことはそれだけか？なら俺は行くぞ」
何も言い返せない間に、樫宮は立ち去ってしまった。
確かに、今あいつは他人に構っている暇は無いだろう。
しかし何か知っているのは確かだ。
樫宮は俺に酌量の余地を与えたってことなのか？
釈然としないまま、時は流れ、下校時間になる。
入学当時は、部活が終わるまで暇を潰したり、練習を見たりして、迅と一緒に帰っていたが、最近の迅は部活をしないのにもかかわらず、毎日学校に残っている。
下駄箱に確かに靴が残っている。
しかし放課後、迅の姿を一度も見ない……いや、見つからない。
迅は放課後になると、誰からも見つからないように姿をくらますのだ。
俺は最近の迅の行動に異変を感じていた。
不可解な行動、野球に対する、否定的な態度。
何があいつを狂わせたんだ。
……考えても何も始まらないな。
帰るか……。
自宅は市内より少し離れた住宅街にあり、学校からは約3キロ離れている。
迅の家もご近所で、たまに朝一緒に登校することもある。
「……」
雲に隠れていた太陽は顔を覗き、夏の暑い日差しが俺の行き先を照らす。
夏の微風が心地よく吹く。
微かに草木はかすれるような音を立てる。
太陽はいつもと違った明るさで、染み込んでいく。
揶揄されたような虚しさが馬鹿馬鹿しく思える。
通学路をまっすぐ寄り道もせずひたすら進む。

こんなに憂鬱な気分で帰ったのは迅ちゃんと喧嘩した日以来だ。
「……今日はほんと疲れた」
はぁ、と溜め息をつきながら腕時計を見る。
針は5時を回っていた
歩くことさえも億劫に思いながらも自宅に到着。
父さんはまだ帰ってないみたいだな。
玄関では妹がお出迎えしていた。
「はろー！　お兄さん。　お帰りなさいませ」
妹の朋香（トモカ）は突っ込みどころ満載な挨拶で俺を出迎えてくれる。
「帰りました。　で、朋香。　その恒例の挨拶どうにかしてくれよ。
毎日のようにそのかみ合ってそうでかみ合ってない台詞聞かされてみろ、兄さん馬鹿になっちまうぞ」
「えっへへー！　今日は学校で英語ならったから使ってみたんですっ。それにお兄さんは頭良すぎるから、少し馬鹿になれば丁度いいと思うんだよ」
いや、お前も頭は良いが、たまにバカなのが傷だ。
「なにがえっへへーだ、つうかお兄さんに対してお帰りなさいませ、は無いだろ」
「何度言ったらわかるんだ」
念を込めて言うが、朋香はそっぽを向いて聞こうともしない。
こんな自己中な妹でも学校での勉強の成績は不動の一番で、性格からは想像もつかないのが唯一の誇りだ。
血は争えないな……と、熟熟思う。
まあ、この自己中さ加減はだれに似たのかもわからないが……。
「お前は頭いいんだか悪いんだかわかんねぇな」
「朋香だってやるときはやるんです。　お兄さんと違って」
「普段からちゃんとしろよ。　てか俺と違ってってどういう意味だよッ」
「そのままの意味です」
図星だった。

「そういえば、お兄さん最近帰るの早くなりましたね。どうしてですか？」
「お前には関係ねぇよ。」
今は迅の事は誰にも話したくはない。
「関係なくないですっ。なんでなんでー。もしかして隠しごと？この朋香様に隠しごと？」
「だ、だから関係ないって言ってんだろッ」
眉を顰める朋香。
「お兄さんはいつもそうやって都合が悪いときは逃げる。そんなんだからいつまでたっても童貞なんです」
「童貞は関係ないだろッ」
……いや、あるのか？
「べつに、どうでもいいだろ」
「いえ、どうでもよくないです。　妹には兄の秘密を知る権利があります」
「プライバシーの侵害だろ」
朋香は一向に諦める気配が無い。
なんでこいつはこんなに自己中なんだ……ほんと誰に似たんだよ。
「とうっ」
階段に足をかけた瞬間、朋香は持ち前の身体能力と小柄な体格で俺の前の段まで飛び上がる。
「うわ、危ない！」
大丈夫だよ～と、気の抜けた感じで朋香は言う。
「これだけは言っておきます」
そう言うと、朋香は俺の耳にそっと口を近づける。
「……ん？」
その瞬間、朋香から氷のように冷たい寒気が走った。
「……迅君が危ない」
朋香は声を潜めるようにし言った。
太陽が反射しているからか、朋香の目は朱と黒が混沌としている。

「あんまり隠し事は良くないんですよ。特にあたしにはね」
にこッと愛想良くそう笑みを浮かべ、そのままリビングに入っていった。
……俺は予想外の言葉に、尻込む。
同時に、幾つもの疑問と不安が脳裏をよぎる。
――迅君が危ない――
何故朋香が迅の身に何かが起こっていることを知っているのか。
朋香は迅に会ったことも無く、顔も知らないはずなのに何故そんなことが言えるんだ？
家族に学校の話、よもや野球の話など殆ど話したことがない。
というより、話す機会がないと言った方がいいか。
関わりない朋香でさえ、知っているこの事実を、俺は知らない。
どういうことだ……。
明らかにいつもと違う朋香。
急な寒気と共に、恐怖という感情が押し寄せ、すぐに自室へと入った。
ベッドに身をゆだね、目を閉じ、今日の出来事を整理していく。
先ほどの朋香の言葉、放課後の樫宮の言葉を反芻、咀嚼する……。
そして、ある結論に辿り着く。
迅に避けられている。
どうしてもそうとしか思えない。
或いは、迅は俺に対して何か隠し事があるのか？
どちらにしろ何らかの理由で迅が俺に対して距離を置いているのは間違いないことだ。
迅の不可解な行動、樫宮の言葉、朋香の一言、繋がりはあるはず。
放課後姿を消すのは何らかの事情？
……いや、流石に二週間も続いたらちょっとした用事でもなさそうだな。
――迅君が危ない――
迅との関わりが無いはずの朋香が発した一言。

尤も、あれをそのまま鵜呑みにして良いものかどうかは定かでは無い。
朋香が迅のことを知っている確率はかなり低い。
どれだけ頭脳が優れていても、会ったことも見たことも無い人間の何がわかるっていうんだ。
……しかし、朋香は信じられないような能力の持ち主だ。
その能力は、時には身体的、時には精神的なものだ。
あの朱い眼を見て思い出した。
俺が高校に入る前の話になる。
朋香がまだ１３歳の時、事件は起きた。
２月の終わり、俺は推薦入試で既に進学が決まっていた。
学年トップの成績を誇っていた俺が推薦で受かったのは当然の結果である。
尤も、一月前の模試は偏差値７６という結果で、推薦でなくても受かっていたと思う。
しかし、南原第一高校は県で最も高学歴が集まる高校であるからして、受けてみなければわからなかった。
スポーツ推薦などで入る者も居た。
その内の一人が沖田迅蔵だ。
野球部にも、迅並の実力者が揃っている。
まあ、でなければ毎年のように甲子園には出られないしな。
そんな役者の揃ったステージに、今か今かと待ち望んでいた時、その事件は起きた。
俺と朋香は勿論同じ中学で、普段は大抵二人で帰宅する。
しかしその日は少し違った。
俺達はその日、俺が卒業後進学する南原第一高等学校に来ていた。
中学からは８キロほど離れた場所にあるから、行こうと思わなければなかなか、行けない所だ。
入学が待ち遠しい俺は、下見程度のつもりで見に来ていた。
朋香には先に帰っていても良いと伝えたが、「ついでだから」と

言ってついて来た。
妹は小さい頃からいつも俺に付いて来る可愛いやつだった。
普通の女の子と言えば、これくらいの年になると、兄や親に反抗したりする時期だろうに。
朋香は寧ろ俺にべったり付いて来る。　そんな妹は、やはり兄としてもかわいいワケで、甘やかしていた。
俺が南原第一の特に気になったものは、校舎や生徒ではなく部活だった。
俺は中学時代、一度も部活をやらなかった。
否、出来なかった。
両親共々医者で、四六時中働いていて、親の代わりに家事を行っていたからだ。
朋香の為に夕食を作るのも俺だった。
帰宅後、家事をすることが日課となっていた。
おかげで料理が上手くなったのは嬉しい。
しかし、部活動で信頼し合った仲間と汗水流す感動を、一度は経験しておきたかった。
その後悔だけが、今となっては名残惜しかった。
たった一度の中学生活、部活で青春したかった。
そして、その汗水その他諸々を流し合った仲間は、高校でライバルとして再会し、競い合い……高め合い……。
常に弱い自分を想像して、それを乗り越えることで、新たな自分を生み出す。
それが勝負の世界では大切であると俺は思っている。
俺は、部活というものを、本気で高校生活にうち込もうと思っていた。
単に部活と言っても、文化系ではなく体育系……その中でも野球部だ。
小学校時代は、野球を嗜む程度ではあるがやっていた。
だから興味があったのだ。

それに南原第一高校は野球の名門校であり、せっかくだからやってみようと思った。
大して運動神経が良い訳では無いので、入ったとしても試合に出させてもらえるかどうかは定かでは無かったが、俺はその3年間野球をやるという、過程にこそ価値があるのだと思っていた。
何事も経験なのだと、両親からいやというほど言われてきた。
それが出来なかったのは、その両親の所為ではあるのだが。
幸い、最近は俺が朋香に料理など、家事の基礎を教えているので、高校に入る頃には朋香も普通に任せられるようになると思う。
やっぱ女の子はそういうことが得意なわけで、朋香も俺より料理、や洗濯、掃除など、上手くなった。
正直3年間の頑張りを半年間で抜かれてしまうのは悔しかった。
まあ、こんなことは実際親がやるのが当たり前のことだと思うのだが、父さんも母さんも、忙しいからそれどころじゃないのはわかっている。
尤も、今では仕事が少なくなり、夕方でも母が居ることが多い。
そして、その日夕方。
俺が少し目を離した間に、朋香が居なくなってしまった。
既に校舎内に居たので心配はなかったが、俺が連れてきたようなものだから、責任を感じ、探すことにした。
校舎の周辺をぐるりと回ったが、どこにも姿が無かった。
生徒は部活に出る者や、帰宅する者が居た。
自己中な妹のことだから、勝手に帰ったのかと思った。
しかし、いくら賢い朋香だって、初めて訪れた場所なのだから帰り道はわからないはず。
急に不吉な予感がした。
何も起きなければ良いが、そう願いながら、校舎内を一心不乱に捜した。
周りから怪しい奴だと思われていそうだ。
……何時間経っただろうか。

時計の針を見ると、２０時を回っていた。
夏と言えど、辺りはもう暗くなってきている。
学校も、戸締まりを始めたので外に出た。
闇雲に探してきたが、もう諦めかけていた。
「ここで最後にしよう」と、あとは朋香が自力で家に帰ったのであろうと願った。
その最後で、俺はもの凄い光景を目にすることになる。
ある工場の廃虚だった。
南原高校からはあまり離れていない場所だ。
俺はそこで朋香と出逢った。
それは見てはいけない光景だった。
……でも見てしまった。
悪魔を……。
殺人鬼を……。
暗闇の中、その朱い眼をしたそいつは、目の前の獲物をめがけ、手を振り下ろした。
その瞬間、標的の獲物の目の辺りからシュッと血が吹き出る。
あまりの一瞬の出来事に唖然とするしかなかった。
標的は呆気なくコンクリートの壁に野垂れ伏す。
その時、俺はやっと状況を把握した、それは人間で、それを襲ったのも人間で、もう一人、奥で倒れているのも人間だということを……。
だが襲ったのは人の形をした化け物じみた存在。
一人は片方の眼球を抉られ、もう一人は背中に深く、何度も何度も切り刻まれたような後があった。
その一直線上にそいつは立っていた。
俺は朋香が関わってないことを願い、目を欹てる。
……朋香だった。
顔は長い髪で隠れて見えないが、実の妹を外見で見分けられない筈がない。

朋香の手には刃物らしき凶器は握られていなかった。
右手は真っ赤な血で染まり、爪は１０センチほどの長さで、鋭利な刃物と化している。
一生脳裏に焼き尽くぐらいの衝撃的なシーン。
俺は、喋ることは疎か、微動だにできなかった。
朋香は殺気立った目つきで俺の方をずっと見ている。
何故、どうして、という感情よりも、恐い、逃げたいという感情が押し寄せる。
だが、その場から一歩たりとも動けない。
朋香の方から動き出した。
一歩、また一歩と、表情を変えないまま、近づいてくる。
顔は返り血で殆ど見えない。
しかしその朱い眼は、確実に俺を捉えている。
金縛りにあったように、指先一つ動かせない。
死を連想した。
死とは何だ？
身近な人間で死んだ人はいない。
祖父祖母は二人とも俺が生まれる前に他界している。
死とは、人の死は、俺にとっては動物が死ぬのとはまるで違う。
まして、自分が死ぬということは考えたことも無い。
人は良く「死」という言葉を使う。
だが実際はその時、死を想像した人は少ないんじゃないか。
死ねばいいと心から思っている人は大抵死とは何なのか想像出来ている。
が、冗談半分にそういった死に関わる言葉を使う人が死を想像できていない。
俺はそちらの部類だった。
歯を食いしばり、目を閉じた――
救急車は数分後やってきた。

両者とも重傷を負いはしたが、一命は取り留めた。
意識を取り戻したその日、朋香はどうやったのかわからないが、病院を抜け出し、行方を眩ました。
あの後、朋香は俺の目の前の寸前で倒れ、意識を失ったのだ。
あの時からだった。
朋香の様子が変わったのは。
朋香の理屈抜きの行動、鋭利で長い爪、そしてあの朱き眼。
支離滅裂な状況に、俺は居た。
……その後は被害者両者とも心身共に回復を遂げたらしいが、あの事件のことに関しては全く覚えていないらしい。
彼らはあの時の記憶が丁度、都合が良いように消去されていた。
ましてや病院から抜け出し、帰宅していた朋香本人も、まるで事件の直後、その場に居なかったかのようなことを言った。
病院に運び込まれ、意識を取り戻し、病院を出て家に帰ったことも記憶に無いそうだ。
彼女の証言は兄の俺と、学校見学に行き、俺とはぐれた。
ここまでは良い。
その後、朋香の証言に因れば、兄が先に帰ったのだと思い、そのままもと来た道を辿って帰ったと言っている。
やはり、流石の朋香も、色々道に迷ったそうだ。
家に帰ったのも、もう親が帰宅している9時半だったそうだ。
父も母も、朋香がその時間に家に帰ったことを確認している。
そうすると、当日の工場での朋香の存在を否定しなければならない。
俺は血の気が引いた。
確かに二人を襲い、気絶し、病院に運ばれたのは朋香だ。
それは警察も病院側も目にしている。
警察側も病院側も、朋香と俺を工場で確認している以上、朋香か、俺が犯人に絞られる。
しかし、この事件にはかなりの矛盾が生じた。

第一に、加害者だろう朋香と、被害者二名の証言。
まあ被害者の二人はあまりのショックで記憶を失ったとでも考えておけば、矛盾は消える。
しかし朋香はどうなんだ？
朋香が病院に運ばれたのは８時半くらいだ。
幸い病院が近くにあったので、１０分もかからず来てくれた。
朋香が目を覚ますまでずっと俺は手を握り安否祈っていた。
工場で見た時と違い、体は普通だ。
あんな爪は無かった。
そして目も黒く澄んだ色をしていた。
朋香の身に何が起きたのかさっぱりわからなかった。
あの時こそ朋香を恐れていた俺だが、今は逆に朋香が心配だった。
変な病気にかかったか、ありえないが、呪われでもしたのかと思った。
それから３０分後には警察がきて、家族に連絡をすると言った。
俺もそれに付き添い、部屋から出た。
警察はいきなり大声をあげた。
「どういうことですか！？」
居るはずのない朋香が、家に居るというのだ。
そりゃ驚くだろう、すぐそこの扉の向こうに朋香が居るのに、家に居るだなんて。
俺も驚き、朋香の声を聞かせてくれと警察に頼み、電話をかわってもらう。
確かに朋香だった。
「おかあさんたちが心配してたんですよ。　今日は珍しくカレーを作って待っててくれたのに。　朋香がお兄さんの分まで食べちゃいました。　何処行ってたんですか？」
あの仕事一筋の親父と、かあさんも、流石に心配をしていたようだ。
かあさんが料理を作るなんて滅多に無いのに。

俺は一安心したが、何故か汗が流れ出てくる。
確かめたくないが、確かめなければならないことがあったからだ。
俺はそっと、扉のドアノブに手をかける。
心臓が今までにないくらいドクンドクンと鼓動しているのがわかる。
そこに朋香は居なかった。
警察は唖然と立ち尽くしている。
家からこの病院まで２０キロ近くあるんだぞ？
「こんなことがあっていいのか……」
警察は呟き、親、朋香に詳しい話を聞く。
そう、その時わかった。
あれは、さっきまで其処に居た朋香は、朋香でない第三者だったこと。
これが第二の矛盾だ。
結局、朋香と被害者の証言が実に不可解であり、凶器も判明しない為、この事件は終わりをつげた。
この事件を要約すると、あの場に居たのは朋香に似た第三者で、朋香は既に家に帰って居たというわけだ。
さらに俺は気付いた。
朋香が特別に凄い力、能力があるわけではない。
ただ、今日俺が帰宅して出迎えてくれたのが朋香ではない誰かというだけだ。
その仮説が完成したところで、朋香からの夕飯コールが響いた。
「お兄さーん。飯ですぞー」
疑いようもない、いつもの調子のはきはきとした明るい声、大丈夫、朋香だ。
少しホッとした。
「わかった、すぐ行く」
俺はそう言い、ベッドから飛び降りる。
夕飯の匂いがかすかに漂う。

今日はカレーみたいだ……。

どこだ……、ここは。
辺りは真っ暗で何も見えない。
今どの方向を向いているのかすらわからない。
自分を軸に、世界が回転しているような錯覚。
焦点が定まらないまま、俺はただ前へ歩き出す。
この世界にゴールはあるのか、行き先が不明のまま、そのゴールに辿り着きたい自分がいる。
それは果てしなく遠いのではないか？
いや、案外手のとどく距離なのかもしれない。
自分一人、灯り一つ無い道なき道、この未知の世界に、寂しいというより希望を見出そうとしている自分がいるのは何故だろうか。
この永久の暗闇を彷徨えば、いつかその答えに辿り着くだろう。
そんな気長な考えを言い聞かせ、希望に行き着こうとしている。
しかしこれは違う。
この世に永遠など無いのだ。
永遠に不可能。
絶対に不可能。
１００％不可能。
この世に０と１００は存在しない。
いつかは行き着く。
それが、いつになるのか知りはしない。
１年、１０年、１００年……。
ただし、一つだけ言える。
いつかは行き着く。
しかし、それまでの果てしない時が絶望の時でもある。
俺は、その絶望から一つの光明を見いだす。
前方から一点の光が見える。
その光は広がりもせず、星の如くとどまり続ける。

とどきそうでとどかない。
それが星だ。
ただし、流れ星のように厄介ではなかった。
それだけが救いだろうか。
俺はそこに答えがあると確信した。
いや、そう願わざるをおえなかった。
その光に近づくにつれ、まるでそれを拒むように逆風が吹く。
それでも俺は前へと進む。
答えはそこにしかないのだから。
進むにつれ、風の勢いは強くなり、やがて凶器と化す。
無数の鎌鼬が起きる。
しかし致命傷にはならない。
「くそっ……」
痛みに堪えながら、その光に向かう。
俺はいつも逃げてきた。
言い訳をして自分に納得させ、人を困らせてきた。
それは自分にも、大切な人にも、嘘をついてきたことになる。
迅……。
朋香……。
俺は、俺は……。
――――ダレヒトリマモッテナイジャナイカ――
どんなものにも屈しない。
その力が、俺には足らない。
今、この試練を乗り越えてこそ、それが実現可能となる。
手を伸ばせば、とどく距離になる。
「あと少し……」
ビューーーー
突然目に見えるような強い風が吹き、俺を包み込む。
風はやがて消失し、その瞬間辺りは草原となった。
雲一つない、快晴。

大きな岩に、俺は腰掛ける形で座っていた。
2、30メートル先に、大きな谷がある。
谷底は深く、下は真っ暗で見えない。
突発的な出来事にも、もう慣れた俺は、この現実に驚きも、疑いもしない。
俺は立ち上がり、辺りを見渡す。
見渡すかぎり、草原だ。
風を感じる。
しかし、あの暗闇で感じた風とは違う。
穏やかで、淀みのない風。
これが【答え】なのか……？
谷底に目を向けた瞬間、またしてもあの風が俺を包み込む。
暖かく柔らかい風だ……。
ここで俺は、意識を失った。

妙な音が聞こえる。
せっかく気持ちよく寝ていたというのに。
うるせえなー。
目を覚ます。
布団を捲り上げ、這いずるようにして目覚まし時計を手にとり、寝ぼけ眼で食い入るように見る。
針は6時ジャストを指していた。
まだ早いじゃねぇか。
ふわーと、あくびをし、背伸びをする。
俺は物音のする扉を見る。
途端に声が聞こえてきた。
誰だよ、こんな早くに。
「あなたは完全に包囲されています。観念して直ちに出てきなさい」
「朋香かよ、まあそんなとこだろうとは思っていたが……、こんな早く起こすな！」

俺はふざけんな、と布団を頭まで被る。
「かわいい妹がわざわざ起こしにきてあげたのに、まだ寝るというんですね？　そうなんですね？」
「どこの誰が起こしてほしいって言ったんだよ」
「健太お兄様」
「その呼び方やめてくれ、吐き気がする」
「ケンタッキー」
「そうか、そんなに俺に殴られたいのか、そうなんだな」
「朋香はお兄さんになら殴られてもいいですっ、寧ろイジメてください」
「とんだドMだな」
「殴られたいので、早くここを開けてください」
「そんな手に引っかかる俺じゃないぜ。なんと言おうと絶対開けねぇ」
「あ、開けないと、キスしちゃうぞっ」
ガチャッ
「意外と簡単に開きますねお兄さん」
「そんな誘惑に乗ってたまるか」
「で、どうやって部屋に入れない状況でできるんですか」
「あ……」
不覚だった。
「馬鹿やってないで、行きますよ。今日は一緒に登校する日でしょ」
「ああ、そうだったな」
朋香とは週に一回絶対一緒に登校する日がある。
俺が勝手に決めたルールだ。
1年前のあの事件が起きないようにと、朋香を守りたい一心で考えたことだ。
まあ、朋香は、毎日でも一緒がいいって言ってくれるのだが、流石にこの年で兄と妹が一緒に登校していたらまずいだろう。
勿論俺が。

「ちょっとまて、今支度する」
着替えようとズボンを脱ごうとする。
あれ、なんだか見られているような気が……。
「いや、ちょっとまて、何故お前は外に出ない」
「お兄さんがいきなり脱ぎ始めて、あたしにその逸物を見せつけてきたのがそもそもいけないんだよ」
「なに勝手に俺を露出魔扱いしてんだよ。　てかまだ脱いでないからッ」
しょうがないなぁと、何故かちらちら俺の方を見ながら部屋から出て行く朋香。
脱がねぇよ！
「さて……」
俺はさっさと支度をすませ、朋香と登校することにした。
……。
……。
「うぅー……」
「……」
「ふぅー」
「……」
「わあっ」
「……ッ！なんだよびっくりするだろ」
「びっくりしたのはあたしのほうですよ。　なんでさっきからお兄さんはあたしの後ろばかりを歩くんですかッ！？」
「いや、それはだな、つまりあれだ、後方から守るってやつ？」
本当は隣で一緒に歩くと、まずいことになるってことは口が裂けても言えねぇな。
てかまず提案したの俺だし。
「本当なの～？」
やべぇ、この目は完全に疑っている目だ。
「朋香こそ何だよ。さっきからスカート押さえて」

「お兄さんは女の子の後ろに立つと、実の妹でも容赦ない人です」
「何が容赦ないんだよッ」
「え、……覗き？」
「普通に言うなよッ！　つかしないからッ」
「お兄さん、えっちなのはよくないと思います」
こいつ……。
「わあったよ、じゃあ俺が前を歩けばいいんだな」
「それはいいですが、後方から何者かが、アサルトライフルであたしにめがけ撃ってきたら、お兄さんはあたしを守ることが可能ですか？　高層ビルの上から、九七式自動砲で射撃されても、守れますか？」
「誰がそんなもん持ってんだよ。　後者においては俺がどこに居ようと関係ないだろッ」
「じゃああたしの隣を歩くしかないですね。あ、その場合手を繋がなければなりません」
「わかったが、手を繋ぐ意味を教えてくれ」
「え、……繋ぎたいから？」
「さっきまでの理屈っぽい言い訳はどこにいったッ」
「あれ、あんなところに廃墟が……」
急に足を止める朋香。
「おい、自己中、なに急に話変えてん……」
だ……。
俺は朋香の向いている先を見る。
急に強い風が吹く
　その先に吸い込まれるように朋香の長い黒髪が靡く。
異様な感覚。
異様な風。
ここは……。
そこは、1年前のあの工場の廃墟だった。
「朋香、此処を知ってるのか」

恐る恐る聞いてみた。
「知らない」という答えを待っていた。
本当にあの日、朋香が関わっていないのだとしたらそう答えるだろう。
しかしあの時の齟齬をはっきりとさせたい気持ちもあった。
「……」
朋香は静かに廃墟を眺める。
あの時の朋香が脳裏をよぎる。
表情からは何も読み取れない。
「いえ、何でもないです。ただ……、お兄さんはまた此処に来るかもしれないですね」
「え……？」
言っている意味がわからなかった。
「特に意味はないです。ただ、なんとなくそう思っただけだから……。学校はあっちですのでここでお別れですね、お兄さん」
朋香はばいばいっとにこやかに手を振る。
また昨日のような蟠りを感じながらも、朋香が見えなくなるまで見送った。
……。
……。
「ここ、空いてるか？」
昼休み、学食を食べに来ていた俺は、意外な人物から声をかけられた。
「樫宮……くん。大丈夫だけど」
実際、樫宮とは昨日言い合いになったので、気まずかったが、真相を聞きたい気持ちもあった。
そういうと、樫宮は俺の前に座る。
樫宮から声をかけられるのは珍しかった。
普段クラスが違うし、部活の時も挨拶程度だった。
「昨日は、強くあたってすまなかった。試合近かったから、焦って

いたんだ」
「いや、俺も、そんなときに迷惑かけちゃって……ごめんな」
「べっ、べつに健太くんが謝ることないぞ」
「いやいや。俺、いろいろ誤解していたよ。てっきり、樫宮君って無愛想で、絡みにくい奴だと思っていた。それに、嫌われているんじゃないかとも思った」
これは本当だ。
実のところ、少しこわい奴だと思っていた。
「嫌いだなんて、俺はむしろお前のことが――……あ、いや何でもない」
中盤あたり、ボソッとして聞こえなかったが、嫌われてないことはわかった。
「いやーそれにしても、うちの学食は美味いよな。バリエーション豊富だし、健康面にも気を使っているし、何よりセルフってのがいい」
そう言いながらお結びを手に取る樫宮。
まあ、学食自体ありふれたものだから何とも言えんが、美味いのは確かだ。
アイスコーヒーを啜りながら言う。
「うーん……俺は腹が満たせればそれでいいかな……まあ、強いて言えばコーヒーは好きだな。市販のコーヒーなんかより全然美味いし」
「そうかー、コーヒーが好きなのか（俺はお前のことが好きだぜ）
俺も実はコーヒー淹れるの上手いんだぞ。もしよかったら今度、俺が挿れてやる」
あれ、何か普通のこと言われた気がするけど、なんか寒気が……。
てか、最後の煎れるの漢字が間違ってたような……気のせいか。
「ああ、ありがと。でも、遠慮しておくよ。樫宮君は野球で忙しいだろうし」
「そうか……。にしても、お前にはこだわりが少ないんだな」

「逆に俺は樫宮君にそんなこだわりがあるとは思ってもいなかったよ」
普段野球のことしか考えて無いやつだと思っていた。
「それは偏見だな。そういうお前こそ、本当はこだわりはあるんじゃないのか？勉強に関しては学年でも上位らしいじゃないか」
「俺は勉強だけが取り柄みたいなものだからな」
でも最近はしていない。
迅のことで精一杯だった。
「十分な取り柄だと思うぞ」
「そういう樫宮君にも野球があるじゃないか」
「……だが迅蔵には適わない」
軽薄だった。
前日の会話をすっかり忘れていた。
「すまない。迅のことを思い出させるようなことを言って……」
「いや、別にいい」
樫宮は続けた。
「だが迅蔵には関わっては駄目なんだ」
自分が干渉できない事。
そう解釈した。
「詳しく話してくれないか……迅のこと」
「……無理だ」
「どうして話してくれないんだ？」
「……俺からは何も言えない。だがな、これだけは知っておいてほしい。俺は迅蔵が嫌いなわけじゃない。むしろ、親友だと思っている」
親友か、だけど言えない、ということか。
俺も迅は親友だと思っている。
俺は焦っているだけなんだ。
自分で迅の心に、真実に向き合わなくては。
「……そっか」

「……」
樫宮でさえ何もできないって言うのに、俺に何ができるんだ。
いや、やるしかない。
俺は迅の親友なのだから。
……。
……。
その後は沈黙が続いたものの、たまにくる寒気と闘いながら、話題を変えて軽く雑談し、午後の授業を終え、放課後になった。
迅は足早に教室を出て行った。
行くか。
俺はなるべく足音をたてないように尾行を開始した。
教室から出てすぐの長く続く廊下には既に迅の姿はなかった。
「流石に速いな……だが」
出て行く時、若干何か足を引きずるようにしていた。
そういえば、今までも迅が歩く時、違和感があったような……。
気のせいか。
とりあえず正面玄関だな。
階段を駆け下り、正面玄関へ向かう。
あれは……迅？
下駄箱の前に立って何してんだ？
俺は死角に入り、身を潜める。
幸運にも、部活に向かう生徒で丁度見えない。
他の生徒に怪しまれないよう携帯をつつく振りをしながら様子を探る。
迅は、何故か辺りを見回し、何人かの生徒が出ていくのを見計らって、それに乗じて紛れながら玄関を出ていく。
俺はその行動に、いくつかの訝しさを覚え、思慮する。
まず、辺りを警戒する仕草。
他人に見られるのを回避しているように見えた。
そういう事情なのだろうか。

次に、迅はいつもならこの時間帯は校内にいる。
もっと言えば下校時刻ぎりぎりまで残っているはず。
ほぼ毎日帰宅するときに下駄箱をチェックしているから間違いない。
何故今日に限って外に出るんだ？
もう一度戻ってくる可能性は十分にある。
だが、この迅の行動には違和感を感じる。
この蟠りは何だと言うのか。
まさか……。
俺は迅の下駄箱を見る。
そこにはあろうことか靴が入っていた。
俺の考えは間違っちゃいなかった。
俺が感じた違和感。
それは迅の不自然な行動だ。
辺りを一瞥した後、数人の生徒に紛れるようにして出ていった。
さらに、靴を残したまま出て行った。
迅は、自分が校内にいるという状況をつくる必要性があったということだ。
これらの行動から、迅は自分が校内にいると思わせたかったということが推測できる。
それには、他者に見られないことが前提だったのであろう。
大きな学校だ。
それこそ歩き回られたら見つける可能性はかなり低い。
そうすると、次に考えられる可能性。
それが、中にいると見せかけたトリック。
少し考えれば気づいていたのに。
しかし、この事実は迅の尾行にはかなりのデメリットを示した。
校内と校外。
どちらが厄介かは明らかだ。
中なら最悪防犯カメラを使って捜そうと思っていたのに。

もう追うにしても手遅れか。
明日こそ、そう思っていた矢先、ふと、今朝の登下校が脳裏をよぎる。
「お兄さんはまた此処に来るかもしれないですね」
もしや……。
「まだ可能性はある」
不安感にのまれながらも、目的地に足を運んだ。
静かだった。
中は暗く、微かな太陽の光が見え隠れする。
その微かな光が廃墟内を照らしてくれる。
まだ4時だというのに。
ガランとした空気が、あの事件の情景を重ねる。
不気味だった。
しかし本能的に俺は前へと進む。
広さは学校の体育館くらいに及ぶだろう。
ちょうど壁の突き当たりに階段があった。
階段というより梯子に近かった。
足元が覚束ないので、足音を確認しつつ登っていく。
丁度中間あたりまで登った時、上の階から急に大きな物音がした。
なんだ……？
登りきったところで覗いてみると、人影らしきものが見えた。
一階と比べ、二階は窓が多く明るかった。
話し声が聞こえる。
3つの人影を確認した時、今度は激しい怒鳴り声が響いた。
「てめぇ、ふざけんじゃねぇぞ。ほら、さっさと今週の分ださんかい！」
同時に鈍い音が聞こえた。
怒鳴り声をあげた男が誰かを蹴ったのだ。
蹴った男は、背が高くがっちりとした体格である。
奥に誰かがうずくまっている。

喧嘩か？と思ったが、背の高い男の隣に立っているもう一人の大柄の男が金属バットを片手に、その倒れている人物に今にも殴りかかるような体勢で構えていた。
それを見て、瞬時にリンチだと気付く。
「もう少し懲らしめる必要があるんじゃねぇか？」
大柄の男は、バットを担ぎそう言う。
「そうだな。俺たちゃてめぇのせいで退学になったといっていいんだ。だがお前は今も学校でへらへらと平然と過ごしている。俺はそういうお前を想像すると虫酸が走るんだ。てめえさえいなければ！」
先程よりも強い蹴りが容赦なく直撃する。
「ぐはっ」
「沖田くんよー。俺たちは手荒な真似はしたくないんだ。あんさんが、金さえくれればそれでいいんだ」
沖田……迅！！
予感は的中したみたいだ。
最も過酷な形で。
でも何故だ？
迅はこんな暴力団みたいなやつらとは関わりが無いはず。
退学？……何のことだかさっぱりわからない。
「もうお前たちに金を渡す義務は無いはずだ。１０万……。１０万あれば良かったはずだろ」
「俺たちがそんなはした金で満足すると思ってんのか？３０万だ。それで勘弁してやろう」「そ、そんな大金無理だ。１０万だって、中学の頃から貯めていた全財産なんだ」
「だまれ！」
またも、背の高い男は蹴りを出そうとするが今度はもう一人の男に止められた。
「まあまあ。ここは俺に任せてくれ。沖田くん、君はまだ重大なことに気づいていない。君はこのことを誰にも言ってないよね」
迅は俯き加減に頷く。

「だけどね、どういうわけか俺たちの様子を探っている奴がいるようなんだ」
「なん……だって」
「しらを切るつもりか。てめぇの回しもんだろうが！……ふっ、まあいい。そいつにはイヤと言うほど言い聞かせておいたぜ。俺たちに関わると痛い目に合うってことをな」
「そんな……まさか、なんで」
樫宮のことに違いないだろう。
言えない理由はそこにあったのか。
にしても厄介だ。
俺はこの二人の顔を思いだした。
二人とも元南原校野球部で、どちらも2年でレギュラーであった。
背の高い方は、井川貴宏（イガワタカヒロ）ピッチャーでクローザーだった。
実力は十分にあり、万能型の選手だった。
しかし、1年の樫宮入部後、彼がマウンドに上がることは無かった。
樫宮の才能は本物だった。
欠点が見つからなかった。
彼を完全に上回っていた。
そしてもう一人は大嶽昭平（オオタケショウヘイ）。
5番サードで、打撃に関してはレギュラーの中でも、高い技術を持っていた。
彼は一年生最後にはレギュラーに上がり、甲子園を経験している。
が、沖田迅蔵はそれを遥かに凌駕する実力で、ポジションを奪い取った。
監督は、「プロでも通用する」と過大評価している。
スピード、守備、バッティング、どれをとっても高校野球屈指の実力だった。
入部するや否や、レギュラーとして活躍。
更に頭脳明晰。

将棋の実力は全国４位。
コンピューターバッティングセンター。
そうよぶにふさわしかった。
この二人の活躍により、井川、大嶽の存在は薄れていった。
そして、ある日突然、彼らは退部した。
原因は知らなかったが、その後更に学校自体をやめているなんて。
何があったんだ。
「まさか樫宮の奴から近づいてくるとは、こっちとしては好都合だったぜ。あいつには借りがあったからな。そうだ、どうせなら樫宮にも手伝わせるか」
「そうだな。そいつはいい」
「おい、話が違うじゃないか！誰にも言わなかったらダチには手を出さないって言ってだろ。それに約束の１０万も出したんだ」
「話が違う？それはこっちの台詞だ！……まあ、お前がどう言おうとも、ばれたもんは仕方ねぇ。あの冷静沈着な樫宮をいたぶるのは、さぞ清々しいだろうな。それに、はなっから約束なんぞ破るつもりだったんだ」
「くそ……」
迅は今にも井川に襲いかかりそうな形相で拳を握り締めていた。
「そもそもお前たちが退学処分になったのも自業自得じゃねぇか！」
「自業自得だと？……笑わせるぜ。てめぇさえ俺たちがタバコ吸ってたのを先公にちくったりしなかったらこんなことにはならなかったんだ」
そうだったのか……。
この学校では校則違反などする者は少ない。
優秀な生徒でなければ入れないからだ。
退学処分なんて十年に一人の割合だ。
しかし今年はそれが起きた。
２年の生徒二人が退学になるっていうのは最近の話だった。
丁度、迅が部活に出なくなり、俺もすぐ帰宅する日々となった頃

だ。　タバコを校舎内で吸っていたところを教師にばれ、その際教師に暴力をふるったことが原因だ。
結果、教師は全治１ヶ月の大怪我。
暴力事件を起こした二人は退学となった。
その二人が、井川と大嶽だったとはな。
迅は正義感が強い。
だから違反をする彼らは許せなかったのだろう。
しかし、結果として、彼らから恨みを買ってしまった。
迅は、正義感は強いが体は弱い。
昔、慢性腎不全により、手術したこともあったらしい。
喧嘩をして勝てるはずがない。
今までの会話から推測するに、彼らは迅から金を巻き上げているのだろう。
迅の家は一般家庭であり、金が多いわけが無い。
迅は大方、バイトで金を稼ぐ為にクラブを休んでいたのだろう。
どうしてそこまでするのか、それは、樫宮や俺を守る為だろう。
「約束が違うだろ！」……迅はこう言っていた。
約束……、多分これは友達には手を出さないでくれという約束だったのだろう。
勿論、奴らはこのことを迅が誰かに言った場合、そいつ共々痛めつけた。
そう、樫宮だ。
迅は誰にも迷惑をかけないよう、隠していた。
本人も言っていたように、迅が樫宮に助けを求めるわけがない。
しかし樫宮は、何らかの方法で迅と彼らの関係に気づいた。
そして、そのことが彼らにばれ、ひどい目にあわされた。
樫宮は望みを俺に託すしかなかったのだ。
しかし、樫宮は自分の二の舞になるのを恐れ、言うのを躊躇っていた。
その中で樫宮は、俺が迅を助けることができるだろうと信頼して

くれていたんだ。
迅が部活に関して聞いても答えなかったのは、このことを隠すためだったのだろう。
……俺が迅を助けるしかない。
「おれはな。てめぇらみてぇなきたねぇことしたり、ルール破るような奴が大嫌いなんだ！」
迅は立ち上がり、井川の顔めがけ、渾身の右ストレートを放つ。
意表を突かれた井川は避けることができず、顔面に直撃した。
「グハッ」
井川の身体は反動で揺れ動く。
しかし、迅の方もよろけていた。
よく見ると、迅の足には、無数の殴られたような酷い痣があった。
あれで良く立てたもんだ。
「てめぇ、もう赦さねぇ……！」
井川は大嶽から金属バットを受け取り、躊躇無く迅めがけ振り下ろす。
今までで一番強烈な音が響く。
あいつら……。
「へへっどうだ。俺に喧嘩を売った罰だ。もう少し痛い目にあいたいみたいだな。……ぶっ殺してやる！」
井川のバットが迅の脳天に打ち込まれる直前、自動的に俺の体は動いた。
「なっ！？」
「うわっ」
迅の体は一瞬宙に浮き、そのまま吹き飛ばされる。
それと同時に、井川のバットは空を切る。
「何が……起きた」
「ッ……誰だ！？」
「今までの会話、全部聞かせてもらった」
「てめぇは……確か一年の米倉」

「覚えていてくれていたんですか。なら話は早いです。迅から手を引いてください」
「くははっ、面白いことを言うぜ。覚えているもなにも、沖田と仲がいい奴は徹底的に潰すつもりだったんだ。まあ、手を引いてやるよ。お前が変わりにぶっ殺されるけどなあ！」
俺が手を前に翳すと同時に、風は生き物のように井川の持っているバットを纏い上昇。
そして、旋風となり、バットは空気中をスライドするように移動し、風の消失とともに呆気なくコンクリートに落ちる。
「なにっ！？」
力が漲る。
なんだ……このチカラは。
目を閉じる。
そこには、空気中に漂う風、あの草原で感じた穏やかな風を思い出させる「風」があった。
はっきりと、何かが渦巻いているのが見える。
俺はこの渦巻きを、体全体で感じ、取り込み、自由に扱えることが出来るようになった。
「くそっ、どんな手を使ったか知らねぇが、恐るるに足らねぇ。こんなモノ使わなくてもこの拳があるんだ」
「井川、用心しろ、コイツ何か変だぞ」
吹き飛ばされたバットを拾う大嶽。
「ぬおぉぉお！」
井川はもの凄い雄叫びとともに、俺目掛け殴りかかる。
ビューッという風の音がした瞬間、俺の体は蜃気楼のように一瞬消え、後退する。
井川の拳は俺を的確に捕らえていた。　既に俺のいない空間を。
間髪入れず、前進。
井川の鳩尾を叩く。
勢いは申し分ない。

威力も、弾丸のそれとほぼ変わらない。
手ごたえもあった。
井川は白目をむいたまま崩れ落ちる。
「かはっ」
寸刻の合間に、井川は地面にひれ伏していた。
「あなたはどうします？」
「な、な、なっ……付き合ってられっかよ！」
大嶽は拾い上げたバットを投げ捨て、逃げていった。
「……健……太。何故此処に」
先程の衝撃と、井川たちにやられた傷の痛みで、意識が朦朧としていた迅は、今やっと意識を取り戻した。
「後を付けてきた」
嘘だ。
本当のことを言っても信じてもらえそうになかった。
「あれほど後を付けられてないか警戒して来たのに。……それに、いとも簡単にあの井川をぶっ倒しちまうなんて……うぐっ」
「喋らないほうがいい。ほら」
手を差し伸べる。
「すまない」
その手をみた途端、胸が痛んだ。
非道い傷だった。
今日1日でなったわけじゃないだろう。
足もこんなに痣が……立っていられたのが不思議だ。
足の皮膚は青黒く変色していた。
俺がもう少し早く気づいてやっていればこんなことにはならなかった。
いや、今はそんなことどうでもいい。
迅が助かったのだから――
「健太……ありがとう」
その後、俺は迅を支えながら、病院へ送った。

幸い、軽い打撲で済んだ。
本当に良かった。
迅の「ありがとう」という一言が心に響いた。
俺は大切な友達を守ることができた。
これが、友情……なのか？
……。
……。
「おーい、健太！」
放課後、今日もいつも通り、教室で帰宅の準備をしていると、迅が呼んでいることに気づいく。
「お、迅。もうケガ大丈夫なのか？」
「おかげさまでこの通りだ」
包帯で巻かれた腕をぐるぐると回す。
「おい、あんま無茶すると、また痛めるぞ」
「こんなことで痛がってちゃ駄目だぜ。なんせ、今週末の試合は出るつもりだ。もちろんベンチだけどな」
「本当か！？……あ、でも、数週間も休んだのに、監督はいいって言ったのか？」
「大丈夫だ。迅蔵は試合に出れる。俺からも監督にお願いした」
どこからか、樫宮も会話に入ってきた。
「あ、樫宮君。居たのか」
「樫宮でいいよ、健太。それより、迅蔵から話は聞かせてもらった。やはりお前は俺の見込んだ通りの男だった。ありがとう」
「まてまて、お前らいつの間に仲良くなってたんだッ！？……あと、礼を言うのは俺の方だ。二人とも、迷惑かけてすまなかった」
「いやいや、当たり前のことしたまでだって。何せ俺たち、親友だろ」
「いいこと言いやがって」　迅は照れくさそうに笑う。
久しぶりに見た笑顔だ。
無意識のうちに、俺の頬も上がっていた。

「まあそういうわけで、今から部活なんだけど、見にくるか？」
「当たり前だろ。　今日から毎日応援してやる」
「おれも健太が応援してくれるとやる気がでるぜ！」
　またも包帯で巻かれた腕を持ち上げようとするが、今度は樫宮が止める。
「まだ焦るのはどうかと思うぞ。　俺も昔、靱帯が切れていたのを無視して無理やり動かしていたら、悪化していき、結局１ヶ月間できなくなったことがある。だからこういう時こそ、まず体のケアが大切なんだ」
「そうだったな。　そんなことあったよな……」と、呟く迅。
　中学時代のこいつらの関係がわかるような気がした。
「とりあえず今日は見学すればいいんじゃないかな」
　迅にそう言いつつ横目で樫宮を見る。
「えー」と、嫌そうにする迅。
「健太の言うとおりだ。今日は見学しろ」
「軽く流す程度に……」
「お前の軽くはあてにならん」
「いや、おれ、天才だからだいじょ……うぐっ」
　問答無用にげんこつが炸裂。
　とりあえず落差を考えたほうがいいぜ、樫宮。
「よし、そろそろ行くぞ迅蔵！」
　迅は首根っこを掴まれたまま連れて行かれた。
　まあ、最終的には迅が監督にお願いして、軽いメニューをやらせてもらったのだが……迅の体は見た目以上に酷かった。
　その後は迅と数週間ぶりに、一緒に下校した。
　ガラガラ。
「ただいまー」
「家間違えてますよ」
「あ、すみませんでしたー」
　ガラガラ。

……ん？
「……てッ、俺の家はここだ！」
「あ、お兄さんだったのですか。すみません。お兄さんはこの時間帯にはもう帰らないと踏んでいたゆえゆえ」
コイツ……。
「……まあ、いろいろあったんだ。また、前みたいに帰り遅くなるようになるから」
「そうですか」
「どうしてわかったんだ」
「え、何のことです？」
「俺がまたあの廃墟に行くことだよ」
「……女の勘、ですかね？」
それだけなら良いが。
「まあいいや。とりあえず兄ちゃん疲れたから寝るな。ふぁ……おやすみ～」
「お兄さん、勉強もしっかりするんですよ」
「わかってる。親には心配かけさせたくないからな。んじゃ」
そして夕飯までぐっすり寝ることができた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2333o/

エターナル∞トレイン

2011年10月8日02時42分発行